


水稻「あきたこまち」を作りこなすための7つのポイント

1. 山間部（標高300m以上）に適応する良食味品種。成熟期はハナエチゼンと同じで、8月下旬から9月上旬に成熟する極早生。
2. いもち病常発地には作付けしない。いもち病に弱く、気象条件によって、かなりの被害を受けるので、種子消毒と病害虫防除を徹底する。

月	4			5			6			7			8			9		
旬	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育段階・主な作業	播種期	出芽期		田植期	活着期		分けつ期			最幼穂形成期	穂ばらみ期	出穂期	穂ぞろい期			乳熟期		成熟期
主な作業	〇〇〇 塩種播 水子選 消毒			△△△△ 元病田 肥害植 施虫え 用防除	雑草防除					病 害 虫 防 除	穂肥施用	病 害 虫 防 除				病 害 虫 防 除		刈 乾 燥 ・ 調 製
水管理									中干し							間断かん水		落水

1. 健苗育成 浸種を十分に！

- ①種籾の準備：3～4kg/10a
- ②塩水選(比重：1.13)、種子消毒の実施
- ③浸種…出芽しにくいため、十分な浸種と催芽で、均一なハト胸状態に。
- ④播種…時期：4月上旬
量(ばらまき)：乾籾で100～120g/箱
浸種籾で120～150g/箱
- ⑤育苗の目標(中苗)
育苗日数30～35日
草丈15cm程度
葉数3.5～4.0枚
(不完全葉除く)
- ⑥温度管理・水管理
苗丈は短いので、無理に伸ばさない。水のやりすぎ、温度のかけすぎは禁止！



出芽期	30～32℃
緑化期	昼20～25℃、夜15～18℃
硬化期	昼15～22℃、夜10～15℃

2. 田植え 太植えは禁止！

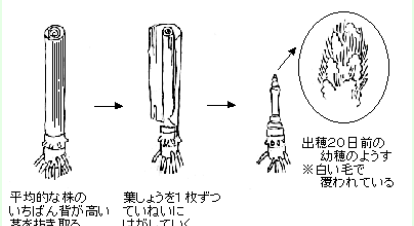
- ①田植時期 5月5日頃
- ②栽植密度
条間30cm、株間18cm(18.5株/m²)
植付本数は3～4本/株
※太植えにすると茎が細くなり、倒伏しやすくなるほか、過繁茂となり、いもち病、紋枯病の発生を助長するため。
- ③雑草防除
地域の慣行に準じて行う。

3. 水管理 登熟向上のために！

- 中干しは必要な茎数を確保した後に、7日程度。(6月下旬)
※根の健全化と倒伏防止のため。
- 出穂後30日間は間断かん水。
※根の張りが弱く、圃場が乾き過ぎると登熟歩合が悪くなり、玄米品質が低下するため。

4. 施肥 倒伏しやすく、いもち病にも弱いので、施肥量は控えめに！

<幼穂の確認方法>



①施肥量(10a当たり成分量、単位：kg)

地帯	山間部		
	窒素	燐酸	加里
元肥	3.0	7.0	4.0
穂肥	3.0	-	3.0
合計	6.0	7.0	7.0

②穂肥の施用
穂肥の施用時期でも葉色が濃いので、葉色で判断するのではなく、幼穂長を確認して、下の2つの方法のいずれかで施用。
<出穂期の20日前(幼穂形成期)：主稈の幼穂長が2～3mmに達したとき。>
・出穂期の20日前の1回：緩効性肥料を窒素成分で3kg/10a
・出穂期の20日前と10日前に分施：速効性肥料を窒素成分で各1.5kg/10a
平年は、出穂20日前が7月1日頃、出穂10日前が7月11日頃。
(注)元肥に緩効性一発肥料を使用する場合
元肥に窒素成分で5～6kg/10a **(穂肥を施用しないこと。)**

③実肥は、絶対に施用しない。
※玄米の蛋白含量が増加し、食味が低下するため。

5. 病害虫防除 いもち病防除を徹底しよう！

- ①田植え
長期残効型の箱施用剤を施用
※いもち病・イネミズゾウムシの防除
- ②6月下旬(葉いもちの発生始めまでに)
いもち病(葉いもち)防除。粒剤の場合は、粉剤を散布するより早めに散布すること。
- ③7月中旬(穂ばらみ期)
いもち病(穂いもち)防除。粒剤の場合は、粉剤を散布する場合より早めに散布。
※紋枯病の発生、ウンカ類の被害が予想される場合は同時防除。
- ④8月上旬(乳熟期)
斑点米カメムシ類の被害が増加しているため、粉剤または水和剤を散布。

◎病害虫防除所のホームページなどの発生予察情報も参考にしてください。
※奈良県病害虫防除所
URL <http://www.jpnpn.ne.jp/nara/>

6. 収穫 適期刈取で良質米作り！

- ①刈取適期は出穂期の35～40日後(全体の籾の9割程度が黄色く変わった頃)、平年は8月27日頃。適期刈取に努める。
※刈遅れると、倒伏しやすく、穂発芽粒、胴割粒、茶米が増加し、玄米品質が悪くなるため。
- ②乾燥
・乾燥目標水分は14.5%。
・刈り取った籾の水分が高いときは、最初は低めの温度で予備乾燥。
- ③調製
・高品質の米に仕上げるため、ライスグレーダー(網目1.8mm)で選別し、屑米を除くこと。

7. 土づくり 米作りの基本！

- ①稲わらの還元
田植えの3ヶ月前までに石灰窒素(すき込む稲わらの約20分の1の量)と一緒にすき込む。山間部の乾田では取れた稲わらの半量(200kg)をすき込むが、半湿田・湿田には稲わらをすき込まない。
- ②15cm以上の深耕
作土が浅いと、枯れ上がりや倒伏が多くなって収量・品質とも悪くなるので、トラクターの速度とロータリーの回転数を遅くして、深耕する。
- ③土壤改良資材の施用
肥料で補うことのできない養分を補給するため、稲わらをすき込む前に土壤改良資材を施用してから耕うんする。

(生育の目安)

播種期	田植期	最高分けつ期	出穂期	成熟期	稈長	穂長	m ² 穂数	精玄米重	千粒重	1穂籾数	登熟歩合
4月上旬	5月5日頃	7月上旬	7/18～7/22	8/25～8/29	76～81cm	18～20cm	320～350本	520～550kg/10a	22.7～23.2g	80～85個	82～86%

注) 1. 水稻奨励品種決定調査(平成10年～14年)のデータから作成
2. 試験場所：榛原町三宮寺(標高350m)
3. 栽植密度：17.9株/m²(条間31cm・株間18cm)